

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第190号（2022年3月）



白井啓治

（二八）見わたせば、ふるさとを謳う山がある

（2008年12月4日）

『香炉峰の雪は…』

と雨戸を開けたら冬っ子が覗いていた』

冬のはじめの頃になると決まって、香炉峰の雪は…と呟いてみたくなる。しかし、これはいったいどういうことなのだろうか。

白楽天の「香炉峰の雪は簾をにかけてみる」の有名な詩句で、今はどうなのかは知らないが、国語の教科書に載っていた。それを今も覚えていて、冬のはじめになると決まって口について出るのである。確かこの詩句は、漢文ではなく古典の教科書にみたように思うが、はっきりしたことは覚えていない。特別に思い入れのある詩句というわけでもない。

東京のビル群の中にいた時分には、この詩句を思い出し、呟いてみても、特別に思うこともなく、今年も冬になるのだなと気づくだけであった。しかし、この茨城の里にきた今では、妙に心に響いてくるものがある。

我が家の窓から筑波嶺を望むことはできないのだが、外に出て少し歩くと、何処からでも筑波嶺を眺めることができる。青春時代を北アルプスの麓に育った私には、筑波山は何とも女々しい山に見えてしまうのだが、香炉峰の雪は…と呟いて眺め見る山としたら実に美しい山といえる。日の出前の紫色に染めた筑波嶺。地平線が茜に染まった中に黒いシルエットの筑波嶺。時々、季節にその姿を変えて楽しませてくれる。



（絵： 兼平智恵子）

この雑文に「常世の国の五百相」を提供くださっている兼平ちえこさんは、筑波山を愛してやまない方である。兼平さんの描く、「風のことば絵」には、必ず何処かに筑波山が描かれてある。兼平さんの身近な人に古里の宣伝屋と揶揄する人がい

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額 2,000 円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32（木村）

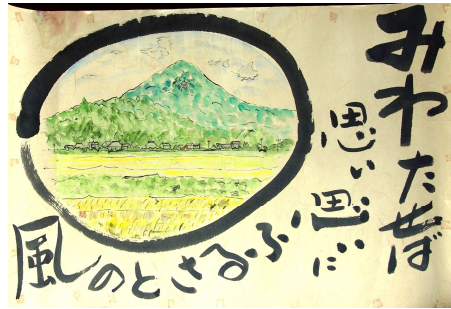
HP <http://www.furusato-kaze.com/>

るが、私はその都度こう励ます。自分の我慢できるものを持ってない奴のやつかみだ。可哀そうな奴だと憐れんでやれ。宣伝屋、大いに結構。気にするな、と。

私も折角、茨城の里に住んでいるのだから、次からは、筑波嶺の雪は…と大声で呟くことにしよう。これで古里の宣伝屋が二人になった。もしかしら、誰かが簾をにかけてくれるかもしれない。（本稿は故白井啓治氏の常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘って掲載されたエッセイを載せています。）

常世の国の朗読物語『風 貴』 兼平智恵子

石岡市八郷地区にあります茨城県フラワーパークから車で、左折間もなくして吉生交差点。この交差点を左折約一キロ辺りで、五年位前に描いた、標高三八〇mの峰寺山の中腹に建てられた天台宗西光院。



一行 白井 啓治

久し振りに仰ぎみた西光院のぽっかりと浮かぶ屋根は緑に囲まれ、やわらかい春の陽に包まれていた。

今回ご紹介します朗読物語（朗読舞劇 著書・朗読者 白井啓治、手話舞小林幸枝）は「関東の清水寺」として知られています西光院での、美しく心優しい娘風貴と、この世のものとは思えぬ端正な顔だちの大比古との不思議な出会い……。

常世の国の朗読物語

風 貴（ふき）

二〇一七年五月二〇日発行

著 者 白井 啓治

表紙絵 兼平智恵子

発行 ふるさと風の会

朗読物語（朗読舞劇）『風 貴』前文を、ご紹介します。語部『石岡市吉生（よしう）、峰寺山の西光院の回廊から見下ろした里村の景観は、常世の国とは確かにこの地に違いない、と納得させてくれます。

この西光院は、大同年間、徳一法師の開山によるものと伝えられております。大同年間といえは平安時代の初期に当たり、今からおよそ千三百年ほど前のことになります。

× × ×

「徳一法師が山麓の村々に布教しに來たときであった。峰寺山の中腹に不思議な光りを放つ岩を見た徳一法師は、その不思議な力を持つて光りを放つ正体は是非にも拝観したいものと、三日三晩、崖下に籠り一心に念じておりましたそうで、すると、三日目の晩に觀世音菩薩があらわれ『崖に櫓を組み、お堂を建立せよ』とのお告げをうけたのだという。

それで徳一法師は、里人の協力をもらい、堂宇を完成させたのでした。

堂宇が完成し、回廊から筑波に沈む夕陽に照らされて黄金に輝く里の光景を見た徳一法師は、大層感動し、西方浄土への思いを寄せて、堂宇を「西光院」と名付けたのだそうです。

西光院の本尊は馬頭觀世音と伝えられており、農耕に欠かせない牛馬の安全祈願の為に、正月の祭礼日には近郷近在からの参詣者で大層な賑わいを見せたのだそうです。

しかし、農業の機械化の波とともに、参詣に訪れる人もなくなり、静かな西光院の姿だけ

が今も変わらず、まほろばの里を見下ろしております。

これからお話してまいります物語は、西光院とともに時の移ろいを見続けてきた、大楠の古木が語り聞かせてくれた、西光院の異聞というか秘聞というか、ちよっぴり切なくもあり、また恋の覚悟を教えてくれるお話してもございます」

語部『それは今からおよそ一七〇年程さかのぼった天保年間のこと。数年間の天候不順が続き、全国的な大飢饉のあったときのことでした。当時の府中松平藩の記録にも、己年以來の凶荒により損耗は四千四百石にのぼると記されており、常世の国と呼ばれたこの常陸の国も長雨による冷害の被害は相当に大きなものでした。

吉生の里に「風貴」という美しく心優しい娘がいた。……………」

これから先、この世のものとは思えぬ端正な顔立ちの大比古が登場です。…………… どのような展開になるでしょう。ふるさと風の文庫でお楽しみ下さい。



木造立観音菩薩像

天台宗西光院の本堂は間口奥行き共に七・六m、総高二・二mの寄棟造り、巖石上に組まれ、脚高十

一mあまりの懸造（かけづくり）という珍しい建造物、堂内には、高さ約十mの自然石があり、その上部に径一mの丸石が重なる。これが霊石・馬頭観音として深く信仰されてきました。（県指定有形文化財、当会報二二〇号にて紹介済）

又、木像立木観音菩薩像は、平安時代、徳一法師が吉生村上根の奥山に開山したと伝えられている立木山長谷寺高照院の本尊であった。（明治の廃仏毀釈により廃寺） 明治四二年四月、吉生地区の方々の尽力により高照院から西光院の境内に遷座されました。（県指定有形文化財、当会報二二二号にて紹介済） 像の高さは五・九m一本の立木に刻んだものと推定されていますが腕の一部が寄木であり、誰の作か不明という事です。

右手に持っているのは蓮の花の蕾と聞いています。

参考資料 石岡の歴史と文化

○ 裸木にとまってるよ 春の陽 智恵子

労音時代の回想2

木下明男

結婚式（祝う会）

1960年代後半から参加した労音運動（良い音楽を音楽を広める活動）は、三つのスローガン（コンセプト）の下に繰り広げられた音楽鑑賞運動です。その三つの掲げられたスローガンは、「良い音楽を安く多くの人々に！」「企画運営は会員の手で！」「国民音楽を育成創造する！」です。この活動に集まってくる多くの若者は、それぞれの職場での悩み等を語り

合い、生き方について学びました。スキーやスケート、ハイキングやキャンプ、正に歌って踊って恋をする健全な若者たちの集う場でありました。真剣にサークル活動を広げるため集う若者は、当然のように生き方を学び、泣き笑い怒り・・・丁度此の頃ＴＶドラマで流行った「若者たち」そのものの世界に浸りました。4～50年も昔の話です。

このような若者たちの集まりですから、当然のように多くの恋が実り、多くのカップルが誕生しました。私もその渦中の一人だったので、地域内の病院サークルから参加してきた女性と結ばれました。私たち以外にも多くの仲間が結婚しました。この頃仲間の間での結婚式は、祝う会と言う実行委員会が主催で、主に人前結婚式と言う形（仲間の中で誓い持ち寄りの料理等手づくり）が主でした。私たちも、地域の区民会館で400人の仲間たちに祝われ結婚式を挙げました。私たちが活動していたエリア（南部地域Ⅱ大田区・品川区・川崎市）では、数年間で10数組のカップルが誕生し、また東京全体や全国を併せると100組を超すカップルが生まれました。活動を始めて10年ものつと、活動をするエリアも広がり、一つひとつの祝う会に出席するだけで大変な事でした。

やがて・・・ただ祝う会に参加するだけでなく、お祝いの挨拶や主賓格の挨拶を頼まれます。

祝う会には仲間だけでなく、二人の両親を始めとした親戚、職場の上司等も参加するので、それなりの挨拶を考える必要も生じます。更に、二人の結婚の立会人・紹介者（媒酌人の代わり）等も務め、結婚届の保証人として署名もします。また、両親・親戚の関係もあり媒酌人を立てる必要に迫られ、その役割を任されることもありました。所謂頼まれ仲人ですか・・・？此の頃先輩から、昔からの言い伝えとして「結婚したら、生涯で三回お仲人さんをしなさい」と言われました。自分の幸せを3倍にしてお返しするという風習ですね。今は、お仲人さんを立てない、職場の仲間も呼ばない、結婚式も増えていきますが・・・。気持ちだけでも沢山の人の福送りをしたいですね。幸せは人に分け与えれば与えるほど、増えていきます。

そんな訳で、立会人・媒酌人の役割を、併せて10組ほどのカップルに努めさせて頂きました。初めての媒酌人の役割は、同じ品川区に働く東北から上京した若い仲間でした。東北の親兄弟は皆教育者で、ただ一人東京で働く息子を心配して、見合いをさせたそうです。本人は気に入って結婚を決めたが、相手が東京に出て来たがらない・・・と相談されました。まだ会ったこともない、その相手に手紙を書き、日頃の生活や多くの仲間が支え合っていると伝え、上京を促しました。そんな関係で、本人と親せき

から仲人を頼まれたのでした。披露宴は実行委員会準備、式は神前で行うことを決めました。式当日上京した両親から、仲人料として多額の礼金を渡されビックリしました。一応受け取り（強く辞退した）数年後に子供が誕生した時の祝いとしてプールして置くことにしたのです。

二組目の媒酌は、大田区に働く保母さんと川崎のIT企業に働く若者です。姉さんタイプで父子家庭に育った嫁さんとギターを弾く坊ちゃんタイプで大人しい旦那さん？川崎の有名な神社で式を挙げ、やはり実行委員会準備された披露宴に・・・！保母さんなので、多くの若い娘がたくさん参加し、次のカップルが誕生しそうな雰囲気・・・？

三組目のカップルは、大きな病院の婦長さんと化学工場の社員でした。病院の院長を差し置いての媒酌だったので大変緊張したのを覚えています。多くの看護婦さんと太田地域の仲間が多数集まり、ステキな会費制の結婚式が作られました。このカップルは、少々高齢でしたが間もなく子供が誕生し、幸せが訪れる筈だったのですが・・・？

ヨチヨチ歩きの子が踏切で電車に接触し・・・？そして私が葬儀委員長を、更に数年後にはその奥様が乳癌で他界、代表弔辞を・・・残念な思い出が残っています。

他に、代表立会人として結婚式に望んだのが、中央郵便局に勤める新郎と足立区の保母さん

新婦でした。式当日には、二人の紹介と結ばれるまでの経過そして餞の挨拶！紹介人として臨んだのは、羽田の航空会社に勤める新婦と労音事務局長。二人を結びつけるために富士山登山を計画（新郎は山登りが趣味）数人で画策し、二人を結び付けました。計画は大成・・・二人の交際が始まり、翌年には祝う会を挙行できました。勿論私が二人の紹介人として、式当日には挨拶と紹介をしました。

最近では、この様な祝いの席は殆ど皆無・・・？案内が来るのは、お別れの連絡ばかり、そして此のコロナ禍で葬儀の席も開かれません。残念な事です。

地域に眠る埋もれた歴史（78） 木村 進

【常陸国における親鸞の足跡】（4）

願入寺（大洗）ー 如信の草庵継承寺

《如信が布教した福島県より移設》

陸奥国大綱（現、福島県石川郡古殿町）の草庵を拠点にかなり大きな布教集団を持つようになります。この大綱の草庵はその後「願入寺」となり茨城県の大洗に移っています

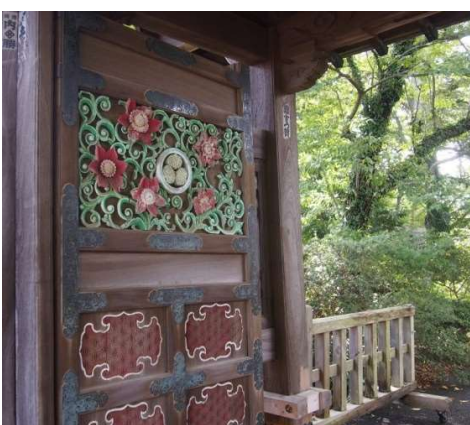
親鸞の常陸国に残した足跡をたどると、まだ訪れなければならない場所がたくさんあることに気がつきます。

まず外せないのが大洗の願入寺と水戸市岸和

田の報佛寺だろうと思います。最初に願入寺から紹介しましょう。場所は大洗のアクアワールド水族館の西側ですぐ近くにかんぽの宿がある。



少し奥まった場所だが、こちらが入口の山門。姿の良い山門だ。



門戸は両側に色鮮やかな彫刻が施されている。

門の手前に「大洗町有形文化財第1号」と書かれた碑が置かれています。

真中には徳川の三つ葉葵の紋が鮮やかである。今回の東日本大震災でこの願入寺も大きな被害を受けたようだ。この門も修理がなされた。その際に、願入寺山門は尾張徳川家の御廟所の表門として使われていたもので、これをここに移したものだということが明らかにになった。

門の脇に寺の説明看板があるが「原始真宗 岩船山・大本山 願入寺」「親鸞聖人の血脈法脈相承乃聖蹟」「水戸黄門・歴代と格さんの史跡」と興味をそそりそうな言葉が並びます。

寺の境内に入ると大きな鐘（鐘楼は震災で壊れたのか、建て直しが必要なようで、一打200円と書かれていました。（訪れたのは東日本大震災の翌年？）この鐘のすぐ脇に「大綱御坊願入寺」と書かれた石碑がありました。

親鸞聖人は越後の流罪が解かれても都に帰らず常陸国に布教にやってきました。最初は下妻の小島草庵、そして笠間の稲田草庵で北の方まで布教に歩きました。

親鸞が都に戻ってから息子の善鸞は更に北へ布教を進めていきます。

しかし、善鸞が教えることが次第に自分の教えから離れてきたことを知り、とうとう善鸞を破門してしまいます。

その後孫の如信（善鸞の子）が東国にやってきました。そして更に北の布教を進めていきました。しかし都の親鸞が亡くなり、如信は正規継承者となりますが、都には帰らず茨城北部や福島県

南部まで布教の範囲を拡大し、大綱（現福島県石川郡古殿町）に草庵（大綱奥之坊）を構えて布教につとめます。

如信は都に戻る途中で立ち寄った太子町の太子堂（現、法龍寺）（前項）で亡くなってしまいました。福島の綱草庵はその後弟子により「願入寺」となり、水戸光圀がここ大洗にこの願入寺を移して現在に続きます。

大綱奥之坊は他にも福島でも継承する寺があるようですが、こちらを如信が残した寺とさせていただきます。この寺は親鸞直系の寺として案内板に紹介されています。

茨城県の大子町や美和地方にはこの如信の足跡や話がたくさん残されている。

美和（現常陸太田市）の裏山に「尺杖山」という名前の山があるが、ここにはこの如信上人がこの山の上で休んだ時に尺杖を忘れたのでこの名前がついたとの言い伝えがあります。低い山でも360度眺めが良い山だそうです。

また、如信が親鸞の法要で都に戻る途中に立ち寄った太子町の太子堂（現法龍寺）で急な病で亡くなったことが知られている。

この本殿は震災の影響か、そばに近寄れないように柵は張り巡らされていた。この本堂は1675年には徳川光圀によって寄進された物か？

こちらの開基堂で、色々な法物などが保存展示されている場所ですが、こちらも閉じられて

いました。



願入寺 開基堂 ← 旧石岡照光寺本堂

しかし、この開基堂は石岡の「照光寺」（府中藩の徳川家の菩提寺）の本堂が新築される時に、この260年ほど前に造られた元の本堂を移築したもので、天狗党の刀傷なども残されています。

境内の少し裏側に磯節の父と言われる渡辺竹楽房翁の銅像がありました。

裏の広場の方に大きな銀杏の木。これも光圀が植えたものと言う。この願入寺をこの大洗に移し、七堂伽藍を寄進したりして、これを保護したのは水戸黄門（光圀公）です。

ここ願入寺は那珂川と涸沼川が合流する地点の高台にあります。かつてこの辺りには祝町と呼ばれ遊郭が置かれていました。

また河岸には渡し船があり、この経営権を願入

寺が持っていたと言われています。

この場所は眺めもよく「水戸八景」の一つに選ばれ「巖船夕照（いわふねのゆうしょう）」と呼ばれています。

「筑波山あなたはくれて岩船に

日影ぞ残る岸のみじ葉」

この願入寺の裏手の広場には水戸光圀の植えたと言われる大きな銀杏の木が聳えますが、その先の林の中に2つの石碑が草に覆われたようにありました。この石碑には「者楽亭跡」と彫られています。この者楽亭は水戸光圀がこの那珂湊や祝町に遊郭を設置し、この場所が特に気に入って「隠居の郭（さと）」と呼んでいたようです。この者楽亭は天狗党の乱の時に焼けてしまったそうです。昔は水戸から江戸までの荷物はこの那珂川から涸沼川を登って船で運んでいました。（涸沼の先は陸路を鉾田や小川まで陸路、その先は北浦や霞ヶ浦を船で運びます）多くの船が行き来していたのだろうと思います。

その隣にある石碑。何と書かれているかよく読むことができない。タイトルを良く見ると「魚山遺響」と書かれているようです。

そうであれば、水戸黄門でおなじみの助さん・格さんの直筆による書を石碑に起こしたものかもしれない。

実物の書は開基堂に展示されている。願入寺の山門を入ったところのすぐ右側にお

堂（万助堂）がありました。

堂にはおもちゃの刀が奉納されています。

万助さんという人を祀ったものらしい。

「地元に住んで、商いをしていた万助さんが仇討で殺されてしまった。地元の子供たちに武術も教えていた信望も篤い人だったが、仇討状をもった相手に敵として狙われ殺されて。その時刀を持っていなかったらしい。そこで刀持っていればこんなみじめに殺されなかっただろうと、刀をここに奉納すれば願いがかなうと言う話が伝わった。」何故？ すこし寺とは異質な気がするが……

これも「祝町」という場所がこのようなものになったものなのか。普通なら仇討本懐をとげ立派だと相手側がほめられそうなものだが。

鉄骨のやぐらを組んだだけの大きな鐘楼「やすらぎの鐘」。東日本で一番大きな鐘だという。（重さ12トン半、口径2・1m）

この鐘も戦時中に大砲の玉となった。それを全行脚で集めた浄財を基に、京都「岩澤梵鐘」により復元したとのこと。

岩澤梵鐘は岩澤の梵鐘製作会社です。

子供のいる所に力あり

伊東弓子

桃の花の出荷が始まった。石岡の雛祭りが始まったと情報が流れてきた。甘酒、あられと同時に

雛祭りには草餅は付き物だ。子供達が幼い日、草餅つくりをよくやった。まだまだ餅草が伸びない時期だったが、子供と共に喜びを分かち合うという私は一生懸命だった。搦り鉢を白替わりにして餅粉と草をまぜすりこぎ棒でついた。五つの頭が小さな搦り鉢の中を覗き込んで、餅を口に入れる楽しみを待っている姿が、ついこの間だった。口に入った満足感は二口、三口で消えていったが春の気分を味わえた。ああ！懐かしい時間だった。あの日の香りが伝わってくるようだ。今はもうない雰囲気となってしまった。自立していったのだからそれでいい！ と思いたくはない。

有難いことに一人ぼっちになった私を救ってくれるかのように、この暮れには妹家族の家に仲間入りして餅搗（つき）に参加している。旦那、息子夫婦も快く受け入れてくれるし、何といっても子供達が多勢いるのが楽しい。そんなにどっぷり浸かってお邪魔している。女の子二人はお母さんを助けて手早く動いている。大きい男の子達は、餅搗き機の操作を上手に熟し、搗き具合、搗き上った餅の扱いがとても上手、下の男の子二人はお供え用の餅丸め、食べる時が、また賑やかでいい。お爺ちゃんを呼んでの気配りもいい。お父さんは朝のハブニングに活躍、餅搗き機が壊れ、買いに走り回っていたとか。お疲れさまでした。次の日の昼、家に帰ると淋しさがこみ上げてきた。掃除も行き届かない部屋の各所にお供えを飾った。平べったくなった餅の上に蜜柑をのせておちついた。餅の丸め方が悪かったのか、柔らかかったせいか、鏡開きまで、その蜜柑はお行儀よく餅の上に乗っていた。

私は申し餅が硬くて切れず「こんなに力がなくな

ったのか」と悩んでいる頃、食べ盛りの子が多い妹の家では、簡単に切れた餅があつという間に1／3位を平らげたとか。お父さんが「正月まで加減しろ」と、言わざるを得なかった。みな不満がみの返事だったとか。いいな、こんなにも活気ある家族、いいな、遠い昔が偲ばれる。

子供が大きくなりかけていた頃、餅搗き機が出回り始まった。得意そうに夫が声をかけた。妹の所の嫁さんも寺の嫁さんも幼い子を連れて集まった。講釈好きの夫は段取りよく、手さばきよく楽しく進めていた。小さい子が多くても狭い家の中でも慌てず、落ち着いて進めていた。あの時も雑煮、黄粉、餡子、納豆、大根おろし、海苔と種類多く用意して振舞った。一働きた夫はゆつくり一杯飲みながら集まった子供や母親達を涼しげな目で見ていた。小さなストーブ一台の暮でも寒さも感じず人気のある温もりは幸せそのものだった。西の窓辺から向こう場に沈む夕陽を見たり富士の山を眺めた。何年か続いていたが、小学生も高学年になって少しずつ離れていった。その頃だったろうか、伸し餅用の袋が出来て使い始めたが馴れるのに大変だった。でこぼこになったりし厚さや、形がおかしかった。

庫裏で世話になり、社宅に移った頃だった。十二月二十八日で仕事が終わる、二十九日から年末休みに入った。「九」餅はよくないと言われているし、夫も二十九日から休みなので三十日に餅搗きすることにして、二十九日は日頃子供達が世話になっている父と母の部屋と庭の掃除をした。「明日はお餅を食べられるぞ」と、張り切つてきれいにした。寺と社宅と嫁ぎ先と三つの生活をしてきた私達家族の一年締切りの仕事だった。

三十日は準備した物を持って出かける。大変な物は父と母が用意してくれた。寺の古い炊事場で始まった。お湯を沸かすことから始めた。蒸し上がるまでは、父と夫は一杯が始まっていた。毎年酒の摘みは赤い酢蛸だった。私達や子供達は鯛(するめ)だった。あれこれ食べ過ぎると、餅がうまくなくなるとのことだった。父と母は六十代だった。みんな若くて元気だった。男の子達はあきて外へ行ったり、戻ってきたりせわしかったが、どの子もよく手伝つてくれた。帰りはお爺ちゃんからお駄賃を貰つて嬉し顔。

三十一日は、掃除をし、四日に戻った時の生活を考え夕方、荒川沖へとむかった。姑と妹は掃除もすませ、お節料理も作り上げ待つていてくれた。お正月、女の多い所帯であれこれうるさく、御屠蘇もゆつくり頂けず気の毒な夫だった。雑煮は舅の実家、天童の雑煮をつくる、それが唯一私の役目だった。姉の家では小豆餅が定番、弟の家では関東風の雑煮をよばれた。二日は妹が子供をつれて遊びに来る。高浜や玉里で遊ぶのと違う喜びの様子だった。

子供の頃の餅搗きもよく覚えている。同じ部落のおじさん達が三人夕方時になると手伝いに来てくれた。それが何故か嬉しかった。板の間の張り板が六く七枚並んで置かれていた。餅とり粉がまかれる。土間では話しがはずみ、米の蒸けるのを待っている。みんな集まって茶を飲んでゐる。かまどの火は赤々とみんなの顔を照らしている。白い餅だけでなく、海苔の入ったたがね餅、豆の入ったものと幾つも作った。みんなで食べたことは記憶にないが、大きな井、青い絵柄の井、皿、大皿はよく覚えてゐる。「昔の物だよ」と聞いた覚え

がある。普段は使用していなかった物だとか、お婆ちゃんがお嫁にくる時持つてきたとか母が言っていた。遠い昔になった。お婆ちゃんも、姑も、父も、母ももう今はいない。近所のおじさんもない。餅のつくり方も換わつた。季節の祝いのためではなく年中売っている。季節の祝いごとにつかれて食べていた餅にはどんな顔があつたろう。父が子供の頃、養蚕をしていた。子供より蚕の方が大事だったんだらう。当時は子供は餓鬼、蚕は「おかいこさま」と呼ばれていたそうだ。土間には「まゆ玉」という飾りがあつたという。赤と白の餅がいい姿だったという。保育園や施設でも「ならし餅」といつて飾られる。

田中の友の話では「かくし餅」というのがあるそうだ。誰にも見つからないように、回りをきよろきよろ見まわして戸棚にしまうそうだ。戸棚というところの大きな板戸をあけて土間からしまう所だらう。「南」の家の戸棚を思い出す。「入」の炉のある部屋の戸棚に御膳ごと片付けたのを思い出す。昼ご飯の後、お湯を入れ一つ一つ箸で洗つてお湯は飲んでしまう。器は伏せておいた。寺の「六畳の間」の黒い広い戸棚も忘れられない。何を出し入れしていたのだらう。

「田中」では、ならし餅を榊の小枝にさして飾るといふ話を聞いた。葉の濃い緑と、紅・白の餅の色合いがよかった。

お葬式の次の日、当家では餅をつき、黄粉をまぶして寺へ持つてきてくれた。「四十九の餅」といった。それを頂くのも楽しみだった。(黄粉にはお砂糖が入っていない) 近くの大寺のご住職はお一人暮らし、四十九の餅を頂いても食べきれないので、もうご遠慮したいといわれたとか(何でもつ

たいない事かと子供心に思ったが、お檀家も多かったしご苦労の一つだったのだろう

お盆には（バラッパ餅）といって、ばらの葉に餅をはさみ、ご先祖さまをお送りする道の角においてあった。

雷電山の春祭りは玉里五千石の農作業の始まり、盛大に行われたと聞く。お赤飯やお餅、草餅が奉納されて一年の豊作と雹の害、雷さまの害がないことを願ったそうだ。次の日奉納してくださった大きな餅を切って、奉納されたお宅へお配りしていたのを思い出す。

世の中は随分変わった。大自然を敬うことを忘れ征服している姿だ。人と人のつながりもお粗末になった。

八十年走馬灯のように過ぎてきた。でも二度と巡ってこないあの日だ。そこにいた人々の力を貰って、心を受継いで元気でいこう。子供や若い人の力を分けて貰おう。

茨城県御城印帳

小林幸枝

全国各地の神社で発行しているご朱印帳は有名ですが、最近では御城印帳というものもあります。またその他にも色々の印帳があるそうです。

御城印（ごじょういん）帳というのは、お城の名前が印刷された半紙のことですが、長野県松本市の松本城が登城記念に発行したのが最初だそうです。それが全国へ広がって今ではかなりの数の御城印があり、それを集めてまわる「御城印帳」巡りもブームになってきています。茨城県内であれば、水戸城は茨城でもっとも有名なお城になります。

この水戸城の御城印も一つではなく何種類も発行されています。



右の御城印が水戸城の御城印ですが、この他に、「大手門復元記念」「二の丸角櫓版」「観梅記念」などどれも色鮮やかでデザインがかっこいいです。観梅記念も春限定のバックに桜をあしらった「西の内和紙」でできたものなどもあります。



水戸徳川家の居城ですが、ほとんど江戸（小石川後樂園）にいました。

残念ながら、石岡城、府中城の御城印帳はないようです。とても残念です。

茨城県内では発行されている御城印は、島崎城、牛久城、岡見城、小坂城、東林寺城、新地城、久野城、延命寺山城、下小池城、塙城、福田城、土浦城、布川城、古河城、古河公方館、水戸城、御城（常陸山方城）などです。このような「御城印帳」も、また集めてみたいと思います。

風と共に 《理》

大輪啓展

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。
今月のテーマは、「育」

ここ数日、毎日の様に強風です。自然の力とは偉大ですね、この自然の力の前に人類は幾度となく辛酸を舐め、その数と同様の恩恵を受けています。

ともすれば、被害やマイナス面だけを取り上げがちですが、世の出来事には両極があり、必ずその裏では恩恵のプラス面を受けているのです。

人間とは、面白いもので、良くされた事の記憶は残りませんが、悪くされた・被害を受けた事は、余程の事が無い限り忘れないのですから。

今回のテーマとしては、広い意味での育という事で、私なりの持論を展開していきたいと思えます。

育つ、育む、育てる、様々な様相がありますが、どれも難しいんです。

どれにも影響しますが、

育つ為には、衣食住がどれをおろそかにしても、将来に両極を与えるでしょう。

育む為には、豊かな感受性を必要とし、自身や周囲に与える影響も多少なり出てきます。

育てる為には、忍耐や相手を深く理解する必要が出てきます、育て方如何ではその人の未来に大いに影響が出るでしょう。

3つの言葉にそれぞれ付け足していますが、どれにも必要となる事がらず。

私自身の最大のテーマと言いましようか、性なのかもしれませんが、働き出してから今日に至るまで、他の誰かを育てるという事が、必要以上について回っている様な気がしています。

他人ですから、生い立ちからその人を見てきた訳ではありませんので、本質的に短い時間で相手を理解するには、限度があります。

ですから時には見誤る事もあり、その都度理解すること、新たな発見であったり、しなくても良い苦労をしてきているのも事実です。

この所、ある程度パターン化されて来た事をまとめる事が出来て来たので、昔に比べ苦労も減ってきましたが、それでも赤の他人を変えるのは容易な事ではありません。

ですが、そうしていかなければ、管理職たる自分が楽に仕事を進める、問題を事前に潰しておくと言う観点からすれば、必ず必要される事でもあり、それなら楽しみながらやった方が良いでしょうね。

1人1人を理解し根本に触れる事で、少しずつでも協調性であったり凝り固まった部分を掘り起こしていく事で、ほんの些細な他人からは認められる程ではないにしろ、確実に変化していく事が

私自身の報酬の一部となっている、毎回毎回、とてもどこかしく感じますが、育てるとはそう言う事なんですよ。

1つ話す事で10を理解する人がいます。そんな人出会った時はワクワクします。

無駄な会話を必要とせずススイと事が運んでいきますし、その中には相乗効果と言えるべき何かを手に入れられる確率が上がりますので、予想以上の成果がうまれます。

勿論、出会える確率は限りなく少なく、優秀な人間が地に埋もれ見つけ出すのは、天文学的数値となります。

1つ話す事で1つを理解してくれる人、多くいると助かります。およそ3割程度でしょう。

1つ話したところで、期待値に届かない人、世の中の大半を占めています。

良く見受けられるのが、他の人の話を遮り最後まで人の話を聞けない人、言葉の端をとって理解したふりをする。私はこれをされると、指導する気を失せさせられます。

また、不要な情報を手し、悪戯に拡散する人、何が楽しいのか真実でも無いのに、鼻高々と自慢げに話すその姿は滑稽としか良い様がありません。

ですが、3割程度いる理解力を示した人達に対しても、敵わないのに後に自分にとって不利なるのに、妨害行為や余計な事をしがちで、数が多いから厄介なんです。

さらに優秀な人が1人いれば、その他多勢の烏合の衆は抑えられので、その様な組織では3割程度の人間も働き易く業績も伸びるでしょうけど、今の日本でもその様な構図の会社は少ないんです。今回のテーマの続きは来月に持ち越します。それではまた来月。



やまと暮らし (61)

さと女

今年もまた誕生日がきた、FBの友達から多くのお祝いの言葉が・・・嬉しいやら、気恥ずかしいやら・・・夫に、誕生日を消してと言ったが断わられてしまった。

・誕生日祝いを頂いた友達へ、お礼を・・・ありがとうございます。八郷からの筑波山見に来て下さい。

ありがとうございます。楽しいこといっぱい作ります。

・いつもの散歩。部落を一周したり、山羊牧場で遊んだり・・・歩くコースは、その日その日に足の向くまま、今日は歩くのが楽しくなる山道のコース。気持ちのいい山道、昨秋お年を召した御夫婦が山仕事に精を出していると思っていたら、いつの間にか伐採した木がきれいに積み上げられていた。椎茸栽培なのでしょう、あまりにも美しくきれいなお仕事。お人柄が忍ばれます。

・寒いサマーイ日でした。蕎麦屋「まんまや」さんの「引越先」を覗いてみる。ママの仲間たちが何やらお裁縫、お店の椅子用に小さな座布団を縫っていた。私も早速お手伝い。お昼もいただき開店前にお客様気分を味わった。待ち遠しかった開店も間もなくのようです。愉しみ・・・！

・早朝新聞を取りに外に出る・・・あまりの風の冷たさに、身体がぶるぶる。いつものこの時間、まだ明けきらぬ空を見上げては、遠くに行ってしまった友人知人に、今日もよろしくお願ひしますと語りかける。そうする事によってなぜがスッカリした気分になれる。足尾山の方を眺めると、大きな笠雲が掛かっている。そしてまんまるの月が山の向こうに降りる所だった。今日も良い日でありますように・・・！

・前夜から強風が吹き荒れた寒い一日・・・。
「いちごや」さんからお手伝いの要請が、さっそく朝から駆け付けた・・・。ご夫婦二人で苗の手入れをしているが中々進まないと言う話に、いつもの仲間が集合。イチゴハウスの中で、苗の枯れ葉や不要のランナーを取り除く作業。二人で棟のハウスを半時間程で片付けた。甘い香りとつまみ食いをしながらのお手伝い・・・御夫婦にも喜ばれこちらもうれしくなった。美味しいいちごが提供されるまでには、さまざまな作業がある。数日前からハウスに置いてあるミツバチの巣に、ミツバチが一匹も居なくなったとか？受粉が上手くいかないという形の悪いいちごになってしまいうらしい。ミツバチはもう戻らないので早く手配しないとなあと、ボヤイテいた。

下士官の手記 2 燕石（えんせき）

（先月号からの続き）

×月×日

ここにきて、国民党軍の本格的な反転攻勢が始まった。

圧倒的な大部隊の兵力で、3方向から押し寄せてくる。日本軍はこれにどんどん押し捲られてしまう。多くが海軍の陸戦隊で、大口径の火砲もなく、戦車も持っていない。我々も、機材とともに必死で逃げ戻るしかなかった。大慌てで後退して海岸線沿いに布陣して、何とか食い止める。塹壕を掘り、土嚢を積む。

運悪く逃げ遅れた小部隊は悲惨だった。敵兵によって有無を言わず、首を切り落とされ、見せしめの晒し首にされた。多くの負傷者が、こちらこちらに寝かされていた。時折、敵の砲弾が炸裂する。無電で応援の要請を送った。

×月×日

通信隊は大忙しとなる。

戦果報告や、目標の座標を打電する。本土からは次々と作戦命令が送られてくる。私は本部に呼びつけられ、有線電話で指示を出すことになった。司令部もここにきて通信の重要さに漸く気付いたと見えて、待遇は格段に良くなる。新米の兵士達もこの頃は慣れたと見えて、てきぱきと立ち働く。有線通信は、ドラムに巻かれた電線を、前線まで引いてゆく。敵もこの通信を妨害するため、集中して撃ってくる。雨あられと降ってくる銃弾を避け乍ら匍匐して、かろうじて前線にたどり着く。部下からは幾人かの負傷兵が出る。私自身も、前線までケーブルを引いてゆく。

運よく、いまのところ戦死者は出ていない。

×月×日

海を渡って、海軍の双発爆撃機が編隊を組んで飛んできて、敵陣に爆弾の雨を降らせる。

幾度も波状攻撃をする。戦闘機は低空で飛行し、機銃掃射を浴びせる。胴体の目の丸のマークが鮮やかだ。兵士たちからは歓声が上がった。この数次にわたる爆撃で、敵の主力は総崩れとなる。

（これは、世界の戦史上、初となる渡洋爆撃となった。）

海軍の巡洋艦や駆逐艦が湾内深く入ってきて、艦砲射撃を浴びせる。頭上を砲弾が唸りをあげて飛んでゆく。

目標の位置は、通信で伝えられる。軍用地図に示された座標を、伝える。命中しなかった場合は、修正した座標を伝える。上空を飛行する爆撃機・戦闘機とも交信する。

×月×日

有線による通信が巧くいったせいもあって、作戦が成功した。これによって一気に戦況は逆転した。

部隊長からは、感状とともに甘味品などが届けられる。

また一つ胸の勲章が増えた。同時に正式に陸軍伍長に任官した。これで正式に下士官の分隊長となったわけだ。師団始まって以来、最年少の分隊長だという。

×月×日

つぎつぎに港に接岸する大型輸送艦からは、完全武装の兵士が続々と上陸しているようである。大口径の大砲も陸揚げされ、逃げていく敵軍のど真ん中に打ち込まれる。大砲の音、銃声にもすっかり慣れてしまった。

通信作業の合間に、擲弾筒の操作、機関銃の操作、トラックの運転、新式の無線機の使い方。覚えることは山ほどあって古参兵から、いろいろと教えてもらう。

×月×日

敗走する敵を追って部隊が発発してゆく。

我々にも出動命令が下る。再び、先発の所属部隊を追求するつらい行軍が始まった。

×月×日

道のわきには、今までなかった敵兵の死体が転がっている。いたるところ、爆弾や砲撃の跡の穴が開いている。

×月×日

ときには小さな戦闘に巻き込まれることもある。行軍する道のわきには、両軍の作った塹壕がある。地雷にも用心しなくてはならない。

局地的に始まった戦闘は、いまや拡大する一方である。軍の上層部は、敵の兵力を見くびって、簡単にけりがつくと考えていたようだ。海軍の陸戦隊の応援に、3個連隊を送り込んで、これで制圧できると考えたらしい。

これまで、敵の持つているのは旧式の小銃であり、装備もたいしたことはなかった。ところが、敵はいつの間にか、新しい銃や装備を持った兵隊がどんどん現れた。

こうなると後は数の勝負だ。

上層部は大慌てで応援部隊を送り込んだというわけだ。その中に私も入っていた。

此処の大地は、広大無辺で、どこまでも行っても同じ光景が続いている。

どんな小さな集落にも、道教の「観」や祠がある。内地で言う、神社のような物だ。その建物は

いつものものかわからない古いものもあるし、村人によって、きれいに飾られているものもある。

×月×日。

もうだいたい内陸に入ってきた。歩兵部隊が次々と我々を追いついてゆく。重い通信機材を持っているので、行軍の速度が上がらない。あるはずのトラックも、どうしたわけか届かない。またもや補給が途絶えがちになってきた。途中にあるはずの補給処も、着いてみると移動してしまつて、誰もいなかったりだった。

×月×日

ようやく補給処を探し当てたが、「此処にはもうない。先に行け。」

と、けんもほろろに言われる。

いつぼうで、幾らも年の違わない新兵たちを即戦力に鍛え上げなければならぬ。新米の、指揮官としては、心労で夜も寝られない日々が続いている。

×月×日。

今日も補給処で断られた。

部下たちは、げっそりと痩せてしまった。栄養が足りないのです、それによって発熱や下痢をする者も続発している。

顔も蒼ざめている。このあたりにはたちの悪い風土病もある。

「生水は飲むな、」

と、厳しく言っているのだが、かわきに耐えかねて目を盗んで飲んだらしい。たちまち激しい下痢に襲われる。

内地ではかなり過酷な訓練を積んできたはずだが、実際の戦闘になるとほとんど役に立たない。十分あるはずの補給も、全くとっていいほどな

い。

×月×日

遂に新兵の一人が、行軍中に倒れ、そのままあつというまに息を引き取った。土饅頭に、墓標を立てる。

こんな異国で若い命を亡くした。少しばかりの食料があれば、助かった命である。

「××すまん。」

墓に向かって手を合わせる。他の者も、手を合わせる。中には泣いているものもある。此処に置いていくしかない。初めての部下をこのような形で失った。せめて、トラックがあつたなら、救えたかもしれない。前線の小部隊など、しょせんは捨石である。いい加減な補給体制には、この後も幾度も悩まされる。軍隊という処は、つくづく建前ばかりのいい加減なところだと思い知らされる。

×月×日

今日も、二人倒れてしまい仕方なくここで野営する。四方に手分けして食糧を探しに行かせたが、皆手ぶらで帰ってきた。

×月×日

司令部から連絡があつて、どうしても通信の下士官の手配がつかないからと、もう一個の新米分隊までも押し付けられてしまう。

いざというときの野戦訓練のために、新兵たち二個分隊を連れて、宿营地から出る。

一週間ほど、近くの山野で実包を使い、実戦訓練をする。二つの班に別けて、戦わせる。

奥地まで入ってきているので、廻りは完全に敵だらけだ。いつ鉄砲玉が飛んでくるか、一時も気が抜けない。

付近の歩兵部隊が、支援に駆けつけてくるまで、

なんとしても持ちこたえないとならない。上層部にかけあって、何とか全員の分の小銃と、二丁の軽機関銃、それと、擲弾筒・弾薬を支給してもらった。

大陸での日々 2 徴発

×月×日

農村地帯なので、勿論畑はあるのだが、収穫期はもはやとうに過ぎていく。畑に残されているのは、イモのしつぽや痩せこけた野菜くらいしか残ってはいない。先行した部隊の連中が、通りすがりに根こそぎ奪って行ってしまったのだろう。

×月×日

かなり過酷な訓練の所為もあって、遂に半数ほどが、倒れてしまった。残りの者も、元気がない。小銃がすっかり錆びている。銃や剃刀なども錆びてしまった。大事な通信機材も錆びが出ている。

×月×日

「隊長、昨日行った所の祠には、お宝がどっさりあると、村の者が言っていましたよ。それを頂いちゃいませんか？」

「其れを売って、食い物を手に入れましょうや。このところ碌なものを食ってないんで、力が入りませんよ。」

と言ってくる。

「そりやあまらずいだろう。師団から略奪は罷りならんと通達が出ている。」

「何言ってるんですか。前をいくやつらだって、そこら中で掠め取ってますよ。少しくらい構わないでしょう。」

「自分らだけたらふく食って、食い物を残して

くれないんだからな。ひどいもんだよ。」

「隊長みたいなことを言ったら、そのうち倒れてしまいますよ。」

「どこのやつらだって、隠してあるに決まっていますよ。俺たちがいなくなれば、それを食うんだから。」

「毎日毎日、芋のしつぽじゃあ、鉄砲も撃てませんよ。」

「たまにやあ旨いもんでも食わんと。」

古参兵たちが口々に不満を言う。ほっておけば、勝手にそこらに徴発に行きかねない。挙句に奴民から反撃を食ったらどうするか。後先を考えない此奴らの為に、部隊が全滅するかもしれない。やむをえないが、ここで決断しなければ、分隊が全滅してしまうのはもう目に見えている。

「その五人、俺と一緒に来い。」

一番元氣そうなものを連れて、夜の闇の中、祠に向かう。村を出はずれた、森の入り口にその祠があった。随分と古そうだ。カギのかかった木戸をこじ開け中に入る。懐中電灯をつけて、あたりを探す。小さな祭壇があるだけで、他にはなにもない。

「本当にここなのか？何にもないじゃないか。」

というと、

「ここに隠してあるんですよ。」

といって、床板をバリバリ捲ると、その下には石の板が敷いてある。それを銃剣でこじ開ける。石の板をどけると、いくつかの壺のようなものがある。

「ほらね、言ったとおりでしょう。」

「開けてみよう。」

封印をはがすと、中に光るものがある。祭祀に

使う冠や装飾品なのだろう。別の壺からは、金や銀の塊がでてきた。これは何かの為の蓄えなのだろう。

「おつ、これはめつけものだ。」

酒の壺を手にして、よろこんでいる。

「どれ少し味見させろよ。」

「ダメだ、俺が見つけたんだからな。」

「おい、喧嘩するな、こっちにももつとでかい酒罎があるぜ。」

祭祀の為の酒なのだろう。みんなして持ちきれないような大荷物だ。

「おい、ここで・・・なにをしているか？」村人だ。幾人かいる。

「まずいぞ、見つかった。」

「それは村のだ、置いて行ってくれ。」という。

「爺さん、そんなこと言わず、分けてくれよ。」

「分隊長、かまうことあねえ、やつちまいましよう。こんなにいっぱい酒を隠してたくせに、ふざけやがって。」

気が立っている部下が、小銃を構え引き金に指をかける。

「まあ待て、待て。」と、それを制して、

「爺さん、俺たちは困っている。少しでいいので分けてくれないか、金も十分に払うから。」

と、手真似もまじえてそう言ってたのんだが、

「ぜったいだめだ。」

と言うばかり。こうなってはしょうがない。

「よし。俺が責任を持つ。いいから押し通れ。」

全員銃を構え、押し通った。

「これを置いていく。」爺さんの手にむりやり軍票の束を握らせる。罪悪感に駆られたが、こっちとしても背に腹は代えられないのだ。

×月×日

現金なもので、十分な食料がいきわたると、病
気だった兵士立ちも次々と元気を回復した。この
経験に懲りて、物資の調達を何とかしてやろうと
考えた。

×月×日

二個分隊三十名ほどの兵隊に食わせる食料は、
馬鹿にならない量だ。一食一合。それに副食品。
たまには甘味品も欲しくなる。それに煙草。

内地から持ってきた食料などとはとくにない。
通信隊は、戦闘部隊ではないからと、総てに後回
しだった。育ち灯りの若い兵隊は、すきつ腹を抱
え、考えることと言ったら食べ物のことばかりだ。

×月×日

通信隊には、毎日夥しい数の電文が入ってくる。
その中で、輜重輸送に関する命令書を改ざんする
ことにした。激しい戦闘の前後には、電文の数も
夥しい数になる。

×月×日。

私の「××通信隊」向けの物資調達の電文を紛
れ込ませるのは造作もない。

大規模な作戦には当然多くの物資の輸送がかか
わってくる。そのほんの一部を頂戴するわけだ。
中にはかなり杜撰な命令書があるので、その一部
に、必要な物資の調達命令をまぎれこませてしま
う。

あるいはもう存在しない臨時編成の部隊向けと
するなど、悪知恵を働かせればいくらでもできる。

短期間に、食糧、装備など腐るほど調達できた。
もしも上級部隊にばれたら、それこそ大変なこと

になるが、いつしか開き直ってしまった。同じ物
資がダブって送られてきたりして、港近くの軍需

物資の集積所に滞留してしまうこともあるのを知
っていた。

×月×日

部下の一人の叔父が、こうした倉庫の親玉の古
参下士官だということを耳にしていた。早速連絡し
て、こちらの手元に余っている物資と物々交換す
ることにした。この新兵に二人ほどつけて、トラ
ックで運ばせた。ろくに手当もしない上級の司令
部に対してむかつ腹が立っていた。大事な部下を
死なせてしまったのも、上級司令部のいい加減さ
から起きた事だと腹が立っていたのだ。
誇りに思っていた通信隊だったが、こうして、
とうとう泥棒部隊になりさがってしまった。

×月×日

かすめとつた一部を持って、いつぞやの村に行
った。村長に、何時かの分だと言って渡した。

「こんなにくさん貰って、・・・」
としきりに礼を言うのだった。

「このあたりを取り仕切る馬賊の頭目は、取り
立てばかり厳しくて、みんな困っている」

という。しまいには、行きたびに、

「いつそ、大人がここの面倒を見てくれないか」
という。

×月×日

やがて、駐屯地に野菜などを持ってきてくれる
ようになった。此の時からしばらくの間、私の隊
は、物資に不自由することがなくなった。二、三
度大きな煙草の葉を持ってきてくれた。遠くから
運んでくるのだという。

×月×日。

五人ほどが高熱を出して倒れてしまった。この
あたりの風土病なのだろうか。衛生兵はいないし、

薬もない。そこで近くの五十軒程の集落に運び込
んだ。一軒の民家で手真似も交えて、水と薬を手
に入れる。このあたりの風土病らしい。沢山食料
を持ってきたので、その半分を、お礼代わりに渡
した。

2、3日早く行動を切り上げれば食糧は足りる。
ついでに、分散して世話になる。此処の世話役ら
しいのが、この家の女主人とお礼の挨拶に来た。
このところ凶作続きで、本当に食料に困っていた
らしい。数日の間ここで世話になることにした。

×月×日。

基礎訓練は毎日続けている。訓練を終えて、早
めに寝ることにした。

×月×日。

騒がしい気配に目覚めてしまう。

表に出てみると、松明を持った村の者が二人の
兵隊を取り囲んでいる。聞いてみると、民家に忍
び込み、その娘と主婦を襲ったらしい。

そのうちの一人は分隊長として連れてきた古参
兵の例の「青島」の奴だった。

「ここは俺に任してくれ。貴様ら、俺に恥をか
かせたな。」

と言って、腰の十四年式で殴りつけた。十四、
五回殴りつけると、拳銃がバラバラになってしま
った。二人は血だらけで、息も絶え絶えで倒れた
ままだ。

後ろに控えている兵に、

「九九式を持ってこい！」

「隊長、それはやりすぎです。」部下が、必死で
止める。

「こいつらは、俺が若いので舐めやがっていた。
今後もあるし、ここでこいつらがいなくなっても、

戦死の方を付けてしまえ！明日銃殺だ。」

私の命令は、絶対である。新兵たちは、まるで神様みたいに思っているようだ。縛り上げて、民家の物置に監禁した。

×月×日

朝になると、二人はいなくなってしまった。新兵の監視の目を誤魔化して、逃げてしまったのだろう。ちょうどいい。戦死の扱いにする。

村長を呼んで、ありったけの金を渡す。

「あの二人に渡してやってくれ。」

《知道》（わかった）

《明白了》（了解）

（好）（よい）

このぐらいの中国語は判る。

その日は遅くなったので、村の家に泊めてもらう。夜などは危なくて歩けないからだ。

×月×日。

大陸の冬は寒い。内地と違って、雪などはいくとも降らないが、昼夜の温度差が激しい。いわゆる大陸性気候というやつで、昼間は暑いくらいなのに、当直で立っていると、外套を通して、寒気が入ってくる。

すこしでも油断すればあつという間に凍傷になつてしまう。油断して、手足の指をなくすものがある。何人もいた。凍えて、電鍵を叩く指もかじかんでしまう。若い新兵らには、とりわけつらいだろう。野外訓練だと称して、あたりの小高い山に行つて、枝を切つて薪を取ってくる。兵舎のたるまストーブで暖を取る。兵舎の裏に山のように積み上げる。

みんなして総出でせつせと薪を切っていると、数人の農民が現れた。しきりに何かを言っている。古参兵に翻訳させると、

「ここは自分たちの待山で、勝手に木を切られては困る。」と、いつている。

「何を言つてやがる。そんなこと知ったことかねえ、分隊長殿。」

「まあそういうな、」

「話は分かった。明日薪の代金をもつて来よう。」

「そんなこと言つて、どこにそんな金があるつていうんです？」

「まあ、黙つて俺に任せておけよ。」

わりと近くに陸軍の師団が駐屯している。

此処へ派遣されて来る途中の集落で、壊れかけた屋敷があつた。その中で休んだのだが、もたれかかった壁が崩れると、中から筒が3本出てきた。中を調べて見ると、古い掛け軸のようである。壁の中に隠してあつたのだ。

師団長は、骨董好きと聞いていたので、鑑定してくれと持つていった。

広げてみるなり、師団長はしげしげと眺め、

「うーん」とうなつて、

「お前これををわしに譲らないか？」という。相当に価値あるものと分かつたので、断つて持ち帰つたのだつた。

×月×日。

改めて、師団長に使いを出して、

「この前の掛け軸、相応の値段なら譲ります。ただし、軍票でなく、この国の硬貨でお願いします。」

と伝えさせた。

×月×日。

次の日、大量の貨幣が届いた。おまけに2、3トンの石炭まで一緒に届いた。私にはわからないが、よほど価値のある掛け軸だつたのだろう。

別れ際に師団長が、

「貴様の持つている軍刀は何だ。そんなものは斬れん。これをやろう。」と言つて日本刀を呉れた。

×月×日。

小山に行つて待つていると、麓の民家に案内された。銭の入った重い袋を、テーブルにどさつと置くと、

「まつてくれ」

と言つて3人で隣の部屋に運び込む。勘定しているのだろう。しばらく待たされたが、やがて出てきて、

「大人、これだけあれば十分ヨ。」と半分以上を返してよこす。

「これは来年の分だ。」と言つてやると、

「さすがに大人は、ふとつばらだ。こんな日本人には合つたことがない。もう代金はいらなからいつでも伐りに来てイイヨ。」

×月×日

増援として新たに一個分隊が到着し、さらにこの分隊長も兼務となつた。こちらはすべて星一つの新兵ばかりである。同時に軍曹勤務の辞令も届いた。そこで急ごしらえの軍刀をぶら下げる羽目になつた。

いまや通信小隊に格上げである。軍馬も到着したので、乗馬練習もしなくてはいいけない。信頼できる古参兵の一人に新しい分隊を任せることにした。

最近まで、下っ端だつたのが、星の数も増えて、今や50人近くの部下がいる。新兵も加えて、にぎやかになつた。

×月×日

訓練と、通信業務で、忙しい日々が続く。
三個分隊を交代で勤務につかせる。

×月×日

いつぞや逃亡した二人の兵士が、惨殺死体となって発見された。巡回の部隊から連絡があった。
匪賊に襲われたのだろう。
(続く)

城県の難読地名とその由来(21)

木村進

数値の入った地名

三箇 【さんが】

小美玉市

栗又四ヶ【くりまたしか】

小美玉市

入四間【いりしけん】

日立市

など

茨城にも数値が地名に使われているところもかなりあり、その中から比較的読みにくい地名を集めてみました。

★小美玉市三箇【さんが】

「さんこ」でなく「さんが」と読む。これは全国に同じ地名が多数あるがほとんどどれも「さんが」である。これは3ヶ所の村が一緒になって「三箇村」となり、この読みが「さんがむら」というのが発音しやすかったからで、村がとれても「さんが」が残ったものと解釈される。
「全国の三箇地名」

- ・茨城県小美玉市三箇(さんが)
- ・栃木県那須烏山市三箇(さんが)
- ・埼玉県久喜市菖蒲町三箇(さんが)
- ・千葉県袖ヶ浦市三箇(さんが)
- ・新潟県中魚沼郡津南町三箇(さんが)

- ・富山県射水市下村三箇(さんが)
- ・富山県射水市本江三箇(さんが)
- ・愛知県豊田市三箇町(さんがちよう)
- ・大阪府高槻市三箇牧(さんがまき)
- ・大阪府大東市三箇(さんが)

- ・福岡県朝倉郡筑前町三箇山(さんがやま)
- ・熊本県上益城郡甲佐町南三箇(さんが)

★稲敷市四箇【しか】

旧河内郡に江戸時代に4か所の村が合併したと思われる「四箇村」が存在した。明治22年の合併で村は「阿波村」になった時に「四箇(しか)」の地名として残った。

★小美玉市栗又四ヶ【くりまたしか】

四カ所の村が合併し栗又四箇村(栗又は地元の地名、武将名)が作られ、玉里村に合併したときに大字名が「栗又四ヶ」になったと考えられる。しかし鹿島鉄道(現在廃線)の駅名は「四箇村駅」であった。

★下妻市五箇【ごか】(旧千代川村)

江戸時代に岡部郡に「五箇村」が存在した。江戸時代に5つに村(沖新田、川崎村、上蛇村、福二村、三坂新田)が合併して付いた村名と思われるが、「後閑(空閑・こが)」の転訛とする説があるという。(角川日本地名大辞典)。明治22年の再編成合併で大形村に組入れられた。

柳田國男の地名の研究資料「地名考説」では、堀之内の地名について述べているところに、鹿島文書に「後閑堀ノ内」とみえ、後閑は空閑(こが)Ⅱ開墾者が押さえていた土地で、堀之内は名主の垣内(かいと)と同じものであるといえる。とあります。

★筑西市二木成【にぎなり】

鎌倉時代に「仁木奈利郷」という郷名があった。これは太閤検地の際に真壁郷に組み込まれた。(角川日本地名大辞典)

★鉾田市二重作【ふたえさく】

南北朝時代から室町時代に「二重佐古村」が存在した。江戸期からの村名は「二重作村」となっている。(角川日本地名大辞典)

★常陸太田市三才町【さんさいちよう】

地名の由来については康平5年【1062年】源頼義の二子加茂義綱が下向の時年が凶悪であるとして当地に3年(3歳)留まったことにちなむと伝える(新編常陸)(角川日本地名大辞典)
江戸期から「三才村」との地名が見られるが、昔は「三歳村」との記述もある。

「三才、三歳」などに類似の地名

茨城県常陸太田市三才町(さんさいちよう)

長野県長野市三才(さんさい)、西三才(にしさんさい)

長野県松本市三才山(みさやま)

岐阜県岐阜市三歳町(みとせちよう)

愛知県名古屋市区西五才美町(ごさいびちよう)

愛知県小牧市藤島町五才田(ごさいでん)

山形県西村山郡大江町十八才甲、乙(じゅうはっさい こう、おつ)

★ひたちなか市三反田【みたんだ】

貝塚や遺跡も多く早くから人々が住んでいた。古くは三多田村と称し、元禄年間頃に三反田村と改称した(水府志料)。またこの地は瓜・茄子などを多く産する所で三反田のどんたつ瓜と称され、大変大きなものが採れたといわれている。(角川日本地名大辞典)

★鹿嶋市根三田【ねさんだ】

地名は「さだ」の根方にいちすることに由来。
「常陸国風土記」にみえる「寒田」から「根佐田」となり根三田に転じたとも言われる。(角川日本地名大辞典)

★稲敷郡河内町十三間戸 【じゅうさんまど】

利根川中流の中州まわりにこの地名があり、茨城県河内町と千葉県香取郡神崎町に十三間戸という地名がある。平凡社「茨城県の地名」によると、1602年に小倉縫殿之助が開墾し、それ以降に移住者があつて一村となつたとある。十三間というのは柱と柱の間の間隔という長さでいえば $1.818\text{m} \times 13 = 23.6\text{m}$ になるので長い建物が存在したとも考えられる。奈良に忍性が建てた北山十八間戸(けんとう)という建物がある。これは当時から病患者の収容施設としてつくられたもので、部屋を1間ずつ区切つて18戸の部屋をつなげたものだった。

この地にも13間で仕切られた施設があつたことも考えられるが、記録にはない。

また、間戸(まど) Ⅱ 窓 で「窓」の語源が

「間戸」という考え方もある。

「間戸と付く地名」

- ・茨城県稲敷郡河内町十三間戸(じゅうさんまど)
- ・千葉県香取郡神崎町十三間戸(じゅうさんまど)
- ・福井県福井市間戸町(まどちよう)

・熊本県上天草市姫戸町二間戸(ふたまど)

★日立市入四間町 【いりしけんちよう】

「入四間」は、御岩神社があり、日立鉾山の煙害による被害を受けた地域として知られている。地名も古くは「入四軒」と書いており、最初にこの地に入植した家が4軒だったからと地元では伝わっている。その入植した時期については、江戸

時代よりも古く、南北朝時代に北朝に敗れた南朝派の武将が、この地に逃げ込み、それが定着したとも言われる。

★ひたちなか市四十発句 【しじゅうほつく】

那珂湊町字四十発句とある。旧湊村には変わった地名が散見される。水音から付いたと思われる「沢メキ、道メキ、廻り目」などのほかに、船窪、貉谷津、ナメシ、和尚塚、十三奉行などその由来が気になる地名ばかりが並ぶ。発句Ⅱハック・ホックなどは茨城各地に存在し、多くが崖地などにつけられたといわれている。この四十発句の地名由来は正確にはわからない。

★行方市四鹿 【しろう】

鎌倉期から南北朝時代には「四六村」と見える。江戸期からは「四鹿村」となった。(角川日本地名大辞典)

★北茨城市大津町五浦 【いづり】

名称は入江が5つあったことに由来。(角川日本地名大辞典) 明治39年に岡倉天心が日本美術院をこの地に移した(六角堂)

★猿島郡五霞町 【ごかまち】

赤堀川(現利根川)・逆川・権藤川にはさまれた川中島で、沼や湿地帯が多い場所であつたが、耕作整理され水田が多くなった。明治22年に「エケ村」が合併し五霞村となった。

★北茨城市関本町八反 【はったん】

地名は古代の条里制に由来するという。(角川日本地名大辞典) 大化の改新で施工された条里制で、これに基づいて耕地を整理し、そこに集落が形成されたところに条里集落となつたと思われる地名が日本各地に存在するが、主に奈良や西日本が多い。北茨城の八反もいつの時代かは不明だが、

同じように耕作地を整理しつけられた地名だと思われる。

★行方市八木蒔 【やきまき】

時期は不明だが北の「羽生村」から分村と伝えられ(新編常陸国誌)、また南北朝時代に「やきまきのむら」という村名が見られる。この地方は橘郷(立花郷)といわれ鎌倉初期には鹿島神宮大禰宜の中臣氏が所領する地であつた。



【御留川(おとめがわ) 便り】 伊東弓子



始めたかという酒造りの創業の歴史」でした。

しかしこの決着はなかなかつかず、裁判は約15年間続きました。

その裁判の決着はほぼ石岡の白鹿に軍配が上がったと言ってよいでしょう。

その内容は、歴史的にはどちらも古く、どちらが先かを判断できないため、ラベルとして区別するために 石岡の白鹿は横書き「白鹿」、灘の白鹿は縦書きで「黒松白鹿」にするというものでした。

今でも石岡の白鹿は作られています、かわい子鹿のマークとともに横文字の白鹿が入れています。

白鹿は大衆酒の分類でしたので、今の石岡酒造さんでは山田錦などの酒米を使った大吟醸「筑波」などのブランド酒が中心となっています。



それぞれの白鹿の名前の由来を見ましましょう。

1) 灘の白鹿 (辰馬本家酒造)

「中国の唐の時代 (617-917 年)、玄宗皇帝の宮中に白鹿が迷い込み、仙人によりこの白鹿が千年前から生きている鹿であると看過されました。

またこの鹿から1000年以上前の漢の武帝時代の銅牌が発見され、それ以降白鹿が大変愛養されたとの故事により命名されました」(辰馬本家酒造ホームページより抜粋)

2) 石岡の白鹿

「元禄年間創業の白鹿醸造本店の先祖が鹿島神社に詣でた際、白い鹿に乗った神人が夢枕に現れて酒の製法を伝授したという言い伝えによつています」となっています。

この鹿島神社の鹿ですが、奈良公園の鹿とともに縁があるのです。

もともと奈良の地には自然の日本鹿が多くいたとも言われておりますが、白鹿は神の使いとみなされておおり、各地でさまざまな伝説が伝わっています。

奈良の春日大社は藤原氏が建てた神社ですが、神社の創建は、鹿島神社の神である武甕槌命が白鹿に乗って降臨した(768年)とされています。

奈良に鹿が多かったことは7世紀後半から8世紀後半に詠まれた歌集「万葉集」にも鹿の啼く様子が、詠まれていることから推察できますが、鹿島神社での鹿の歴史も古く、現在30数頭の日本鹿が飼われている神宮境内にある「鹿園(ろくえん)」の説明書きによると、出雲の国譲りの際に、鹿の神である天迦久神(あめのかくのかみ)が天照大御神の命令を武甕槌大神の所へ伝えにきたことに由来し、鹿が神の使いとされているとのことでした。

また、「春日大社の創建」の時(767年)には、白い神鹿(しんろく)の背に分霊を乗せ多くの鹿を引き連れて1年かけて奈良まで行ったと伝えられています。

この鹿の移動は陸路で送られたようで、鹿の足跡が、東京江戸川区の鹿骨をはじめとして、東海道を三重県の名張まで続いて残っているとされているといわれています。

そのため奈良地方にも元々鹿は棲んでいたが、少なくとも春日大社には鹿島神社の鹿が渡ったと考えても良いのではないかと考えられます。

また、鹿島(香島)神社も常陸風土記では「香」が使われていますが、他の古い文書などではすべて「鹿」の字が使われています。

この歴史も古く、養老7年(723年)頃といわれています。

鹿島の神鹿は長い歴史の間に何度か新たに導入されており、現在飼われているのは奈良の神鹿の系統を受けていると現地の説明板には書かれています。

また、春日大社側の記録によると、948年に常陸国府(現石岡市)より鹿7頭が春日大社へ送られています。春日大社の鹿も長い年月の間に絶滅の危機もありましたが、その時代ごとに、鹿の保護に力が入られてきました。しかし、鹿島の鹿は絶滅の危機が訪れ、春日大社の鹿を譲り受けて現在に至ったようです。

【特別企画】

打田昇三の太平記(19) 巻第八・4

○主上、自ら「金輪法」を修せしめ給う事、

付・千種殿 京合戦の事。

新たに権威を得ようと天皇を擁して立ち上がった反幕府軍勢と、権威を保とうとする幕府軍勢力とが対立するのであるから京都近辺でも何度かの合戦が行われたのは当然だがいずれも天皇を擁する武士団側の景気が悪かった。心配するだけで何も出来ない天皇は仮の皇居に祭壇を設けて連日の

無駄な法会を行なっていた。其の七日目の夜に怪奇現象で壇上に光が現れたので祈りが通じたと思ひ込んだ天皇は、側近の公家である六条少将・忠頼を中將に任命し山陽道・山陰道に派遣された軍団の司令官として赤松入道に協力させるため京都へ向かわせることとした。其の軍勢は千騎ほどしか居なかつたが、都を目指すうちに因幡・伯耆・出雲・美作・但馬・丹波・丹後・若狹などで立ち上がった勢力が加わり、二十万七千余騎の大軍勢となった。

一方、天皇の第六皇子（護良親王？）が幕府に捕らわれ但馬国へ流されていたのだが、其れを但馬守護の太田三郎左衛門尉が奪ひ奉じて丹波国で挙兵し其の勢力も二十万余騎に増えていた。大軍二つが京都を目指しているけれども道中に大軍勢を収容する施設は無いから野宿である。連絡調整を良くしないと混乱が生じるが、両軍共に勝手に進んで来て千種忠頼は西山峰堂を本陣とし、赤松の軍勢は間隔を五キロ程とり山崎に陣を置いた。両陣営ともに功に逸るので抜け駆けを企み作戦の調整などはしない。

特に千種は自軍の多勢を誇り、功名を狙っていたから密かに攻撃日を四月八日の早朝六時に決めていた。ところが、其の日は「仏生日」と言つて仏を尊び供花・焼香し経を上げる日なので、心ある人々は「齋日に合戦を決めるなどは天魔の所業である」と非難する声が多かつた。それでも現代同様に「偉い人には逆らえない」から家臣は真面目に合戦の準備をするしか無い。両軍には諸国武士団が参加しているので或いは親族・知人などが敵・味方に分かれているかも知れない。そこで識別の為に白布に「風」と書いて鎧の袖に付けたり

と余計な手間を掛けたりした。

其れに対して敵を待ち受ける六波羅軍のほうは、三条から九条までの道筋に塀や櫓を急造して射手を配置すると共に狭い小路にも騎馬兵を潜ませて寄せ来る敵を囲み討ちする作戦で準備を進めた。その際に敵の大將は誰か？調べさせると、後醍醐天皇の六男（護良親王）であると分かり、更に副將軍は千種忠頼であることも分かつた。

相手にとって不足は無い：と言うよりも、中途半端な皇族や公卿武士に負ける訳にはいかない。強気になって七千余騎の軍勢を都の中心に配置し万全の守備体制を布いた。

是に対して、千種のほうは攻撃軍勢を分けて上は御所近くから下は七条まで小路ごとに千騎を差し向けて攻撃した。

両軍ともに名を惜しみ生命を軽んじて真面目に戦つたから勝負がつかなくかつたが、其の中に少し風が強くなつてきたのをみて、攻撃軍側から事前に京都市内に潜入させていたスパイが各所に火を付けて回つたのである。

当然ながら各所から火災が発生し戦陣を布いていた武士たちも消防士では無いから逃げる他は無い。その軍勢は幕府本陣に集まつて来たが、幕府の指揮官も火災は管轄外なので放置し避難して来た勢力を防備の手薄な陣に向けた。

まず、予備軍の佐々木・隅田・高橋・南部・下山・河野・陶山・富樫・小早川など五千余騎を一条口、二条口に差し向けて但馬守護・太田三郎左衛門らを討ち取つた。丹波国の荻野彦六と足立三郎は五百余騎で四条油小路まで進み、攻めて来た備前国の薬師寺八郎・中吉十郎・丹兒玉の勢力七百余騎と戦つた。しかし二条方面の友軍が敗れたので途

中下車して引き返した。金持（かなじ）三郎は七百余騎で七条東洞院まで攻め入つたが自分が重傷を負つたので引き返そうと思つたところ敵に囲まれ捕虜となつた。

寄せ手のほうでも丹波国神池から来た八十余騎は、五条西洞院で戦っているうちに味方が撤退してしまい、三百余騎の敵に囲まれて全滅した。結局、激戦の末に幕府方の防衛軍が勝つたようで、攻め込んだ官軍のほうも桂川付近まで退却したのだが、名和小次郎と児島備後三郎が向かつた一条方面攻撃軍は日没まで戦い続けた。敵・味方に知人同士が多かつたので合戦で敵味方になると面倒である。結局、両陣営から呼び戻されて双方が引き別れ、後日の戦いを約束して離れたらしい。武士とは厄介なものである。官軍と言うか反幕府軍が戦死者・戦傷者を調べたところ其の数、七千人を越えたりらしい。天皇とか幕府とかの権威の犠牲となつた気の毒な者たちの数である。

天皇方でも大活躍をした太田、金持などの一族郎党数百人が討死した。実戦の指揮官を失つたので心細い千種忠頼は、一方の侍大將にしようと児島高德を呼んで「…兵たちは皆、疲れて戦い難い状態にある。どうも都に近い布陣では不利らしいので、少し隔てて陣を建て直し、更に近国から加勢の兵を集めてから攻撃しては如何であろうか？」と愚痴とも取れる相談をした。千種はプロの武士では無く、中途半端な公家なので仕方は無いのだが、児島は頭から問題にしない。言い聞かせるように力強く言い放つた。

「…戦さの勝負は時の運になるので負けるも恥ならず、只、退くところを退かず、攻めるべきところを攻めぬを大将の不覚と申します。赤松入道は

僅か千余騎で三度まで京都に攻め入り、退いても八幡山崎陣を死守して居ります。其の間に多くの兵を失いましたが残る兵力は六波羅勢よりは多い筈です。さらに、此処の陣は後方が藪深い山で前方は大河ですから、もし、敵が来ても容易には落とせない筈です。よって撤退するなどは考えないでください。ただし、敵の夜襲も考えられるので念の為に私が七条の橋まで陣を進めてみます。千種殿は信頼出来る四、五百騎を梅津・法輪の渡しに差し向けて護りを固めて下さい。」

それから、児島は三百余騎を率いて七条の橋から西側の陣の守りについたのである。児島高德に痛いことを言われて意気消沈した千種は、暫く近くの堂内で呆然としていたけれども、其処にも敵が来るかも知れない…と思うと恐ろしくて堪らない夜が更けてから、密かに大塔宮を連れて八幡方面に避難をした、というより逃亡して行つた。其れとは知らない児島高德は、合戦の場から峰堂のほうを見上げると初めは見えていた篝火が消えかかっている。

さては、本陣の大将に何かあったかと、部下を連れ峰堂へ向かう途中で荻野と言う武士に逢い「…大将は既に落ちられた…」と報告を受けた。荻野は「…我らも仕方なく戦場を離れるので一緒に…」と言うが、高德は「…先に逃げるような臆病者を大将と仰いだのは私の不覚であつたが、事実を確かめたい！どうか先にゆかれよ…」と撤退する大軍勢で混雑する中を数名の家臣と峰堂へ上つて行つた。

行つて見れば、千種らは余程、慌てて逃げた様で、「天皇の軍である証拠」の錦旗から大將軍の鎧兜まで放り出した状態で、猫の子一匹さえ居ない。

当然だが児島高德は怒り心頭に発して「…馬鹿大將め！堀でも崖からでも落ちて死ね！」と叫んでから暫くは堂の縁に立ち尽くした。

怒りは尤もだが、全体的には負け戦なので何時までも其処に居られない。錦旗を巻いて家臣に持たせ走り下つて淨住寺前で部下たちに合流したのである。児島高德は荻野彦六らと逢い、更に丹波・丹後・出雲・伯耆などの軍勢は篠村辺りで合流して三千余騎になった。やがて此の軍勢は途中の山賊や野武士らを追い払い丹波国高山寺城を奪つて立て籠り「勤皇軍」として名乗りを上げる。

○谷堂、炎上の事

千種らが西山の陣から逃げ出したことが分かつたので、翌日の四月九日には京都中の幕府軍勢が近辺の寺や御堂などに乱入して罰当たりだが神官・僧侶などを追放し、金目の物を奪つた後に建造物を破壊してから火を放つた。折から吹く風に煽られて火は順調に燃え広がり、淨福寺・最福寺・葉室寺・衣笠寺・淨住寺・二尊院などの堂舎三百余と周辺の民家五千余戸が灰になり、寺社内の佛像神体・經典・佛具などから庶民の住居・家財一切が無くなった。

特に其の中の谷堂は、八幡太郎義家の嫡男である対馬守義親の孫に当たる延朗上人が造立された源氏の霊地で有り、北条氏にも所縁の深い場所であつた…にもかかわらず其れが北条の軍勢によつて焼かれたのである。

延朗上人は、武門に生まれながら幼少から仏門に帰依し戒律を守り仏教三字を極めた高僧であられた。此の上人が法華経を讀誦するときには、松尾明神の主（神か仏）が出現して耳を傾け、仏

壇の扉の中で靈魂が奉仕した…という嘘のような嘘が伝説として伝わる。また、淨住寺は「戒法流布の地」と言われ「律宗」唐の高僧・鑑真が伝えた宗派」の名利である。是も伝説なので疑問は多いが、釈尊が入滅した際に弟子たちが棺の蓋を閉じようとした時に一人だけ一匹だかの鬼（捷疾鬼Ⅱしようしつき）が、釈尊の歯を一個盗んで天上へ逃げた。マラソンの先祖である韋駄天（いだてん）が追いかけて奪い返したが、葬儀は終わった後なので「遺骨ならぬ遺齒」は漢の国の道宣に与えられた。其れが、なぜか日本に伝えられ、嵯峨天皇の時代（西暦一四〇〇年代）に理由は不明だが淨住寺に安置された…と言う事で此の寺は知られていた。

それにも関わらず愚か者同士の戦乱により此の大伽藍も焼かれてしまうのである。是も偏に「武運（武家支配）」の尽きる前兆であろうかと人々は噂していたが、果たして北条氏は先ず六波羅（出先機関）が滅び、残る一族は鎌倉で滅亡したのである。「…積悪の家には、必ず餘殃（よおうⅡ悪の報い）有り」とは、この様なことを言うのであろうと思わぬ人々は無かつたのである。

太平記・卷第八は是で終り、卷第九から足利尊氏が登場して戦国の時代が始まる事前運動を展開してくれる。此の人物は戦時中の日本では極悪人の見本の様に言われていたらしく「…足利のタカちゃん」と遊んだ…」と言つた子供が警察に怒られた…という笑い話が残されている。

「太平記」は卷第四十までであり、是から最後の章まで足利氏が登場するのであるから、善悪・好き嫌いは別にして当時の歴史は足利氏抜きでは伝えられないことになる。（卷八・完）（続く）